

金樓子譯注（十四）

興 膳 宏

立言篇九上（承前）

23 見善則喜^①、聞惡則憂、民之情也。苟無憂喜、其惟聖人乎。^②若無喜而不喜、無憂而不憂、蓋何足稱也。

善事を見れば喜び、惡事を聞けば憂えるのは、民の情である。憂いも喜びも無いのは、聖人だけであろう。喜ぶことが無くして喜ばず、憂えることが無くして憂えないのは、何も稱賛するに當らない。

〔注〕

① 見善則喜云云 徐幹『中論』虛道篇に、「由此觀之、人無賢愚、見善則譽之、見惡則謗之、此人情也」。

② 苟無憂喜二句 聖人は喜怒哀樂を超越した存在ということであろう。『禮記』中庸に、「無憂者、其惟文王乎。以王季爲父、以武王爲子、父作之、子述之」。『易』乾卦の文言に、「亢之爲言也、知進而不知退、知存而不知亡、知得而不知喪、其唯聖人乎。知進退存亡而不失其正者、其唯聖人乎」。

24 白鳥、蚊也。^①齊桓公臥於柏寢、謂仲父曰、「吾國富民殷、無餘憂矣。一物失所、寡人猶爲之悒悒」。^②今白鳥營營、^{*}饑而未飽、寡人憂之」。因開翠紗之幃、^{*}進蚊子焉。其蚊有知禮者、不食公之肉而退。其蚊有知足者、^③嚙公而退。其蚊有不知足者、遂長噓短吸而食之、及其飽也、^{*}腹腸爲之破潰。公曰、「嗟乎民生亦猶是」。^{*}乃宣下齊國、^{*}脩止足之鑒、^④節民玉食、^⑤節民錦衣、齊國大化。

白鳥とは、蚊である。齊の桓公が柏寢の臺で休息しているとき、仲父（管仲）にいった、「余は國富み民豊かで、心配ことはない。だがものごとが然るべき所を得ないでい

ると、それが氣がかりだ。いま蚊がぶんぶん飛び回って、腹を空かしたままなのが、心配である。そこで緑の薄絹の蚊帳を開いて、蚊を中に入れてやった。禮をわきまえた蚊は、公の肉を咬まずに引き下がった。足ることを知る蚊は、公の肉を咬んで引き下がった。足ることを知らぬ蚊は、長く咬んだり吸ったりして、腹いっぱいになると、腹が破裂してしまった。公はいった、「ああ、民の生き方もこれと同じだな」。そこで齊の國に命を下して、欲望充足の規範を定め、ぜいたくな食事や、ぜいたくな衣服を慎ませ、齊の國は大いに教化された。

校勘

* 悒悒…『太平御覽』九四五蟲多部蚊に引く『金樓子』では、「於邑」に作る。* 未…『御覽』↓求。* 寡人憂之。因開翠紗之幃…『御覽』↓寡人因之、開翠紗之帳。* 嚙…『御覽』↓嚙。* 公…『御覽』↓公之肉。* 是…『御覽』↓是矣。* 乃宣下齊國云云…『御覽』は以下を缺く。* 止…抄本↓知。

〔注〕

- ① 白鳥二句 『天戴禮記』夏小正に、「白鳥者、謂蚊蚋也。其謂之鳥也、重其養者也」。
- ② 齊桓公 齊の桓公については、說蕃篇3參照。なお當該故事の原據は未詳。
- ③ 柏寢 臺の名。『韓非子』外儲說右上に、「景公與晏子遊於少海、登柏寢之臺而還望其國」。『史記』齊太公世家に、「景公坐柏寢、歎曰、『堂堂、誰有此乎』」。
- ④ 仲父 桓公の宰相管仲をいう。字は夷吾。桓公に仕えてその厚い信任を得、仲父と尊稱された。
- ⑤ 悒悒 樂しまぬさま。『太平御覽』本『金樓子』は「於邑」に作るが、意は同じ。
- ⑥ 知足・止足 『老子』第四十四章に、「知足不辱、知止不殆、可以長久」。
- ⑦ 嚙 嘴に同じ。『龍龜手鑑』口部に、「嚙、正作嘴、鳥喙也」。『御覽』本は嚙。『說文解字』口部に、「嚙、嚙也」。
- ⑧ 玉食 『尚書』洪範に、「惟辟作福、惟辟作威、惟辟玉食」。孔傳に、「言惟君得專威福、爲美食」。またその『經典釋文』に、「張晏注『漢書』云、玉食、珍食也」。

25 夫鬪者、忘其身也、忘其親者也。行須臾之怒而鬪終身之禍。^{*} 然而爲之、是忘其身也。

人といさかう者は、わが身を忘れる者であり、わが肉親を忘れる者である。一時の怒りに任せて終身の禍のためにいさかう。それでもなおそうするのは、わが身を忘れているからだ。

〔校勘〕

* 鬪終身之禍…『荀子』榮辱篇は「喪終身之軀」に作る。『說苑』貴德篇は「鬪終身之禍」。

〔注〕

① 夫鬪者云云 『荀子』榮辱篇に、「鬪者、忘其身者也、忘其親者也、忘其君者也。行其少頃之怒、而喪終身之軀、然且爲之、是忘其身也。室家立殘、親戚不免乎刑戮、然且爲之、是忘其親也。君上之所惡也、刑法之所大禁也、然且爲之、是其君也。憂忘其身、內忌其親、上忘其君、是刑法之所不舍也、聖王之所不畜也」。また『說苑』貴德篇にも、「孫卿曰」としてこの一段を引く。

26 入是國也、言信乎羣臣、則可留也。^①
仕也。^{*} 澤乎百里、則富可安也。^{*}
行忠乎羣臣、則可

その國に入つて、君主の言葉が羣臣に信賴されていれば、留まっていられる。君主の行動が羣臣に眞心を盡くしていれば、仕えていられる。恩澤が領内に及んでいれば、富も保證される。

〔校勘〕

* 可留也…『說苑』↓留可也。* 可仕也…『說苑』↓仕可也。* 澤乎羣臣…『說苑』↓澤施乎百姓。『孔子家語』↓澤施於百姓。* 富可安也…『說苑』↓安可也。『孔子家語』↓富可也。

〔注〕

① 入是國也云云 『說苑』談叢篇に、「曾子曰、『入是國也、言信乎羣臣、則留可也。忠行乎羣臣、則仕可也。澤施乎百姓、則安可也』。『孔子家語』好生篇にもこの語が見える。

27 鳳無司晨之善、麟乏警夜之功。^① 日月不齊光、參辰不並見。^③
冰炭不同室、粉墨不同囊。^④ 有之矣。^⑤

鳳皇には朝の時を告げる長所はないし、麒麟は夜の見回りをする役には立たない。太陽と月がいっしょに輝くこと

はなく、參（オリオン）と辰（アンタレス）が同時に現われることはない。水と炭が同じ部屋に収納されることはなく、白粉と眉墨が一つの袋に入れられることはない。こうしたことがあるものだ。

〔注〕

- ① 鳳無司晨之善二句 『抱朴子』逸民篇に、「夫麟不吠守、鳳不司晨、騰黃不引犁、尸祝不治庖也」。
- ② 日月不齊光 『易』繫辭傳下に、「日往則月來、月往則日來、日月相推而明生焉」。また注④参照。
- ③ 參辰不並見 參（音はシン）は、オリオン座の三つ星。辰は、商ともいい、さそり座の三つ星。アンタレス。參は西方に、辰は東方に在って、同時に現われることはない。揚雄『法言』學行篇に、「吾不觀參辰之相比也、是以君子貴遷善」。
- ④ 冰炭不同室 『韓非子』顯學篇に、「夫冰炭不同器而久、寒暑不兼時而至」。『鹽鐵論』刺復篇に、「文學曰、『冰炭不同器、日月不並明』」。『抱朴子』交際篇に、「譬猶禽魚之結侶、冰炭之同器、欲其久合、安可得哉」。
- ⑤ 粉墨不同囊 『抱朴子』微旨篇に、「沈浮過於金羽、皂白分於粉墨、而抱惑之士猶多不辨焉」。

28

古語云、不鑒於鏡而鑒於人。鑒鏡則辨形、鑒人則懸知

善惡。是知鑒於人、勝鑒乎鏡矣。

古語に、鏡に映すのではなく人に映して鏡とするのだという。鏡に映せば姿形を見分けられるが、人に映せば善惡の區分が預知できる。だから人に映して鏡とするのが、鏡に映すよりも勝ると知られる。

〔注〕

- ① 古語云云 『尚書』酒誥に、「古人有言曰、『人無於水監、當於民監』」。孔傳に、「古賢聖有言、人無於水監、當於民監。視水見己形、視民行事、見吉凶」。『墨子』非攻篇上に、「是故子墨子言曰、古者有語曰、『君子不鏡於水、而鏡於人。鏡於水、見面之容、鏡於人、則知吉與凶』」。
- 29 楚王之食、楚也。故愛楚四境之民。越王之食、越也。故愛越四境之民。天子之食、天下也。吾是以知兼愛天下之民矣。

楚王が食を得るのは、楚である。だから楚の領土の民を愛する。越王が食を得るのは、越である。だから越の領土

の民を愛する。天子が食を得るのは、天下である。だから「天子は」天下の民を廣く愛するのだと知られる。

〔注〕

① 楚王之食云云 『墨子』天志篇下に、「苟兼而食焉、必兼而愛之。譬之若楚越之君。今是楚王食於楚之四境之内、故愛楚之人。越王食於越、故愛越之人。今天兼天下而食焉、我以此知其兼愛天下之人也」。

② 兼愛 差別なく平等に廣く人を愛する。『墨子』に特徴的な思想で、同書には「兼愛」篇がある。

30 成瓦者炭、而瓦不可以得炭。潤竹者水、而竹不可以得水。蒿艾有火、不燒不燃。土中有水、不掘無泉。百梅能使百人酸、一梅不足成味也。

土器を作るには炭が必要だが、土器から炭は作れない。

竹に潤いをもたらすのは水だが、竹から水はできない。もぐさは火氣を帯びるが、火をつけなければ燃えない。土の中には水があるが、掘らなければ泉は湧かない。百箇の梅は百人に酸っぱさを味わわせるが、一箇の梅では味わうほ

どにならない。

〔注〕

① 成瓦者炭云云 『淮南子』説林訓に、「瓦以火成、不可以得火、竹以水生、不可以得水」。高誘注に、「瓦得火則破、竹得水浸則死」。

② 蒿艾有火云云 『淮南子』説林訓に、「蒿竹有火、弗鑽不然、土中有水、弗掘無泉」。高誘注に、「掘猶窮也」。

③ 百梅能使百人酸云云 『淮南子』説林訓に、「百梅足以爲百人酸、一梅不足以爲一人和」。高誘注に、「喻衆能濟少、少不能有所成也」。

31 孔文舉言、「武王伐紂、而懸之白旗。漢祖入關、子嬰不死。② 武王歷年、止有白魚之瑞、③ 漢祖祥應、其瑞不一。④ 是則漢祖優而武王劣也」。殷洪遠云、⑤ 「魏武興師、本由親舉、漢祖初起、本是亂兵。此則魏武優於漢帝」。蔣子通言、⑥ 「漢祖取天下如登山、光武取天下如走丸」。^⑦ 當尋邑百萬、振古未聞、⑨ 溥沱河冰、⑩ 身面流血、豈其易也。凡如此例、有書不如無書、⑪ 委之煨燼、於事爲宜矣。

孔融（文學）が言うには、「周の武王は紂を伐つと、〔その首を〕白旗に懸けた。漢の高祖は關中に入つても、〔子嬰を赦したので〕子嬰は死なずにすんだ。武王は長年の間に、白魚の瑞祥が一度あつたきりだったが、高祖の瑞祥は、一度に止まらなかつた。そこからすると高祖が優れていて武王が劣っていることになる」。殷融（洪遠）が言うには、「魏の武帝の舉兵は、天子の推舉を受けたものだった。漢の高祖の舉兵は、寄せ集めの軍隊によるものだった。そこからすると魏の武帝の方が漢の高祖に勝っていたことになる」。蔣濟（子通）が言うには、「漢の高祖が天下を取ったときには山に登るような苦勞をし、後漢の光武帝が天下を取ったときには玉をころがすように容易だった」。だが王尋・王邑の率いる百萬の敵軍に對峙したのは、前代未聞のことであり、呼沱河が凍結した際には、流血の慘事が生じもして、決して容易なことではなかつた。凡そこの類のことは、書物があるよりはいつそ無い方がましというもので、さっぱりと焼きすてしまえば、すっきりするだろう。

〔校勘〕

*振古…底本は「振」を「震」に作る。抄本・四庫本も同じだが、兩本の注に、「案震當作振」とある。百子本・筆記小説大觀本は「振」に作る。いまそれに従う。

〔注〕

- ① 孔文舉言云云 孔文舉は、孔融（一五三—二〇八）、字は文學。魯國魯縣（山東省）の人。孔子二十世の孫。才氣煥發の人で、詩文を善くし、建安七子の一人に數えられる。『後漢書』七〇・『三國志』魏書一二に傳がある。『藝文類聚』一二帝王部二漢高帝に孔融「周武王漢高祖論」を引いて、「又武王伐紂、斬而刺之。高祖入秦、赦子嬰而遣之。是寬裕又不如高祖也」。武王が紂を伐つたときのことは『史記』四周年紀に、「武王至商國、商國百姓咸待於郊。於是武王使羣臣告語商百姓曰、『上天降休。商人皆再拜稽首、武王亦答拜。遂入、至紂死所。武王自射之、三發而后下車、以輕劍擊之、以黃鉞斬紂頭、懸大白之旗』」。
- ② 漢祖入關二句 子嬰は、秦始皇の孫で、扶蘇の子。趙高が二世皇帝を殺したあと、王に擁立された。『史記』八高祖本紀に、「沛公兵遂先諸侯至霸上。秦王子嬰素車白馬、係頸以組、封皇帝璽符節、降軹道旁。諸將或言誅秦王。沛公曰、『始懷王遣我、固以能寬容。且人已服降、又殺之、不祥。』乃以秦王屬吏、遂西入咸陽」。

③ 白魚之瑞 『史記』四周年紀に、「武王渡河、中流、白魚躍入王舟中、武王俯取以祭」。

④ 漢祖祥應二句 漢の高祖の瑞祥は『史記』高祖本紀に見え
るが、以下その幾つかを記す。「父曰太公、母曰劉媪。其先
劉媪嘗息大澤之陂、夢與神遇。是時雷電晦冥、太公往視、則
見蛟龍於其上。已而有身、遂產高祖。高祖爲人、隆準而龍顏、
美鬚髯、左股有七十二黑子。」「高祖被酒、夜徑澤中、令一人
行前。行前者還報曰、「前有大蛇當徑、願還」。高祖醉、曰、
『壯士行、何畏。』乃前、拔劍擊斬蛇。蛇遂分爲兩、徑開。
行數里、醉、因臥。後人來至蛇所、有一老嫗夜哭。人問何哭、
嫗曰、「人殺吾子、故哭之」。人曰、「嫗子何爲見殺」。嫗曰、
『吾子、白帝子也。化爲蛇、當道、今爲赤帝子斬之、故哭。』
人乃以嫗爲不誠、欲告之、嫗因忽不見。後人至、高祖覺。後
人告高祖、高祖乃心獨喜、自負。諸從者日益畏之。」「秦始皇
帝常曰、「東南有天子氣」。於是因東游以厭之。高祖即自疑、
亡匿、隱於芒錫山澤巖石之間。呂后與人俱求、常得之。高祖
怪問之。呂后曰、「季所居上常有雲氣、故從往常得季」。高祖
心喜。沛中子弟或聞之、多欲附者矣」。

⑤ 殷洪遠云 殷洪遠は、殷融（生卒年未詳）、字は洪遠。東
晉の陳郡長平（河南省）の人。殷浩の従父で、殷仲堪の祖。
『晉書』の殷顗傳等に名が見える。殷融の言葉が何にもとづ
くかは未詳。

⑥ 蔣子通言 蔣子通は、蔣濟（？～二四九）、字は子通、三

金樓子譯注（十四）（興膳）

國の楚國平阿（安徽省）の人。魏の文帝以下の三朝に仕えて、
官は太尉に至り、都郷侯に封ぜられた。著作に『萬機論』
『三州論』があったが、佚した。『三國志』魏書一四に傳が
ある。引用される文の出典は未詳。

⑦ 走丸 『漢書』四五副通傳に、「必相率而降、猶如阪上走丸
也」。顏師古注に、「言乘勢便易」。

⑧ 當尋邑百萬 『後漢書』一光武帝紀上に、「（更始元年）三
月、光武別與諸將徇昆陽・定陵・鄧、皆下之。多得牛馬財物、
穀數十萬斛、轉以饋宛下。莽聞阜・賜死、漢帝立、大懼、遣
大司徒王尋・大司空王邑將兵百萬、其甲士四十二萬人。同
卷一光武帝紀下の贊に、「尋邑百萬、貔虎爲羣」。

⑨ 振古未聞 振古は、『詩』周頌「載芟」に、「匪今斯今、振
古如茲」。毛傳に、「振、自也」。

⑩ 漚沱河冰 『後漢書』一光武帝紀上に、「（更始二年正月）
晨夜兼行、蒙犯霜雪、天時寒、面皆破裂。至呼沱河、無船、
適遇冰合、得過、未畢數車而陷。進至下博城西、邊惑不知所
之」。

⑪ 有書不如無書 『孟子』盡心篇下に、「孟子曰、『盡信書、
則不如無書。吾於武成、取二三策而已矣』」。『孟子』のいう
書とは、『尚書』のこと。

32

往者崇華殿災、詔問高堂隆、^{*}「此何災」。隆曰、「殿名

崇華而爲天災所除。是天欲使節儉、勿復興崇華之飾也」。

さきに崇華殿が火災に遭ったとき、帝が高堂隆に、「これはいかなる災いか」と下問された。高堂隆がいうには、「殿名が崇華（華美を崇める）なのを天災によつて除かれたのです。天は節儉をさせようとしています、もう華美を崇めるような装飾をしてはなりません」。

〔校勘〕

*崇華殿…各本とも「崇」を「承」に作るが、『三國志』魏書高堂隆傳によつて改める。注②参照。

〔注〕

① 往者崇華殿災云云 以下の記事は『三國志』魏書二五高堂隆傳にもとづく。

② 詔問高堂隆云云 高堂隆（？～三三七？）は、三國魏の人。字は升平。泰山平陽（山東省）の人。魏の明帝に平原王時期から仕えて、明帝の即位後は太史令、侍中等を歴任し、官位は光祿勳に至った。經學と天文歴象に通じ、「太和歴」の制定に關與した。『三國志』魏書二五に傳がある。魏書本傳に

いう。「崇華殿災、詔問隆、『此何咎。於禮、寧有所讓之義乎』。隆對曰、『夫災變之發、皆所以明教誡也。惟率禮脩德、可以勝之。』易傳曰、『上不儉、下不節、孽火燒其室』。又曰、『君高其臺、天火爲災』。此人君苟節宮室、不知百姓空竭、故天應之以旱、火從高殿起也。上天降鑒、故謹告陛下。陛下宜增崇人道、以答天意。（以下略）」。

33 君子有三患^①。未之聞、患弗得聞。既聞之、患弗能學。

既學之、患弗能行。君子有四恥。有其位、無其言、君子恥之。^{*}「有其言」、無其行、君子恥之。既得之、又失之、君子恥之。地有餘而民不足、君子恥之。

君子には三つの心配がある。まだ聞いていないことは、聞けないのではないかと心配する。すでに聞いたことは、それを學べないのではないかと心配する。すでに學んだことは、それを實行できないのではないかと心配する。君子には四つの恥がある。然るべき地位にありながら、それに見合う發言もしていなければ、君子はそれを恥じる。「發言はしても」、それを實踐していなければ、君子はそれを

恥じる。すでにものにしたことを、失ってしまえば、君子はそれを恥じる。土地にはゆとりがあるのに民の数が足りなければ、君子はそれを恥じる。

〔校勘〕

*君子恥之…底本校語に、「案此下疑脫有其言三字」。

〔注〕

① 君子有三患云云『禮記』雜記下に、「君子有三患。未之聞、患弗得聞也。既聞之、患弗得學也。既學之、患弗能行也。君子有五恥。居其位、無其言、君子恥之。有其言、無其行、君子恥之。既得之、而又失之、君子恥之。地有餘而民不足、君子恥之。衆寡均而倍焉、君子恥之」。

② 地有餘而民不足『禮記』鄭玄注に、「恥民不足者、古者居民、量地以制邑、度地以居民。地邑民居、必參相得也」。また疏に、「地有餘而民不足、君子恥之者、以地邑民居必參相得、今不能撫養、使民逃散、是土地有餘而民不足、故君子恥之」。

慎之。

將を制御するには、必ず時に應じて手綱を緩めたり張ったりすべきである。事が疑わしければ争いが生じるし、勢力が均しければ亂が起る。そこで蕭何と樊噲は獄に繋がれたし、韓信と黥布は誅殺されてしまった。將を使いこなすには、慎重であらねばならない。

〔校勘〕

*於…抄本↓于。

〔注〕

① 弛張從時『禮記』雜記下に、「張而不弛、文武弗能也。弛而不張、文武弗爲也。一張一弛、文武之道也」。鄭玄注に、「張弛、以弓弩喻人也。弓弩久張之則絕其力、久弛之則失其體」。

② 蕭・樊被於縲綬 蕭は、蕭何（？前一九三）、泗水沛（江蘇省）の人。漢の高祖の功臣で、相國に封ぜられた。『史記』五三蕭相國世家に傳がある。縲綬は、繩を打たれて牢獄に繋がれること。蕭何が高祖に向かって上林苑の空き地

34 制將之法、必使弛張從時。^①事疑則爭生、勢倖則亂起。所以蕭・樊被於縲綬、^{*}信・布見於誅夷。^{*}馭將之閒、可不深

を民衆に開放して農地とするよう要請したとき、高祖は怒って彼を捕縛した。蕭相國世家に、「上大怒曰、『相國多受買人財物、乃爲請吾苑』。乃下相國廷尉、械繫之」。しかし、やがて王衛尉のとりなしで、高祖は自分の非を悟り、蕭何を釋放する。「是日、使使持節赦出相國。相國年老、素恭謹、入、徒跣謝。高帝曰、『相國休矣。相國爲民請苑、吾不許、我不過爲桀紂主、而相國爲賢相。吾故繫相國、欲令百姓聞吾過也』」。また樊は、樊噲（？前一九九）。泗水沛（江蘇省）の人。高祖を助けて漢の建國に功績を挙げ、ことに鴻門の會での活躍はよく知られる。官は左丞相、相國に至った。呂后の妹を娶り、呂氏一族の篡奪計劃に加擔したことを高祖に憎まれて、斬死の處分を受けたが、高祖の死により刑を免れ釋放された。『史記』九五樊噲列傳に傳がある。

③ 信・布見於誅夷 信は、韓信（？前一九六）、淮陰（江蘇省）の人。戰略に長じ、蕭何・張良と共に高祖を助け、漢の建國に大きく貢獻したが、謀反の罪で殺された。『史記』九二淮陰侯列傳に傳がある。布は、黥布（？前一九五）。本名は英布。若いとき法を犯して黥刑に處せられたところから、黥布と稱される。漢建國の功臣の一人で、淮南王に封ぜられた。謀反を企てて、敗死した。『史記』九一黥布列傳に傳がある。

35 夫陶犬無守夜之警、瓦雞無司晨之益。^①塗車不能代勞、木馬不中馳逐。^③勢者君之輿、^④威者君之策、臣者君之馬、民者君之輪。勢固則興安、威定則策勁、臣從則馬良、民和則輪利。

いったい陶器の犬は夜警の役には立たないし、焼き物の鶏は朝を告げる用は果たせない。粘土の車には人の勞力に代わる力が無く、木馬には疾走する力が無い。權勢は君主の乗り物、威光は君主の鞭、臣下は君主の馬、人民は君主の車輪である。權勢が強ければ乗り物は安定し、威光がしつかりしていれば鞭は強く、臣下が従順であれば馬の働きは良く、人民が和合すれば車輪はよく動く。

〔注〕

- ① 夫陶犬無守夜之警二句 『太平御覽』九〇五獸部一七狗下に引く『抱朴子』に、「陶犬無守夜之益、瓦雞無司晨之警」（現存の『抱朴子』には見えない）。立言篇下29にも、「陶犬無守夜之警、瓦雞無司晨之益。塗車不能代勞、木馬不能馳逐。云云」とある。また『太平御覽』九五三木部二松には、『符

子」を引いて、「符子與子登乎太山、下臨千仞之淵、上蔭百丈之松、蕭蕭然神王乎一丘矣。言不出乎耒耜、心不過乎俗人。其猶木大守戸、瓦雞司晨矣」とある。

② 塗車不能代勞 塗車は、粘土で作った車で、明器（埋葬品）に用いられた。『禮記』檀弓下に、「塗車芻靈、自古有之、明器之道也。『釋名』釋喪制に、「塗車、以泥塗爲車也」。代勞は、『抱朴子』論仙篇に、「欲經遠而乏舟車之用、欲有營而無代勞之役」。

③ 木馬不中馳逐 『說苑』談叢篇に、「木馬不能行、亦不費食」。

④ 勢者君之輿云云 『鄧析子』無厚篇に、「勢者君之輿、威者君之策、臣者君之馬、民者君之輪。勢固則輿安、威定則策勁、臣順則馬良、民和則輪利。爲國失此、必有覆車奔馬折輪敗載之患、安得不危。『藝文類聚』五二治政部善政、『太平御覽』六二〇治道部一君には、いずれも『韓子』曰」として同趣旨の文が引かれる。『韓非子』外儲說上には、「國者君之車也、勢者君之馬也」二句が見える。

36 獵猛虎者、不於北苑、釣鯨鯢者、不於南池。何則園非猛虎之藪、池非鯨鯢之處也。責罷者以舉千鈞、督跛者以及走兔、驅騏驥於庭、求猿狖於檻、猶倒裘而索領也。

金樓子譯注（十四）（興膳）

虎狩りを北の宮苑ではないし、鯨捕りを南の池ではない。なぜなら宮苑は虎の住む藪ではないし、池は鯨の居場所ではないからだ。疲れた人に千鈞の重い物を持ち上げよと責めたり、足萎えの人に兎と競走せよと求めたり、駿馬を庭園で走らせたり、猿に檻の中で飛びまわらせたりするのは、皮衣を逆さに着て襟を探すように理不盡だ。

〔校勘〕

*苑…抄本・四庫本↓園。抄本校記に、「案園、原本作苑、謹據下文校改」。*池…底本校記に、「案池、原本訛作河、謹據下文校改」。

〔注〕

① 獵猛虎者云云 『鄧析子』無厚篇に、「獵罷虎者、不於外國、釣鯨鯢者、不居清池。何則園非罷虎之窟也、池非鯨鯢之泉也（中略）責疲者以舉千鈞、責兀者以及走兔、驅逸足於庭、求便捷於檻、斯逆理而求之、猶倒裘而索領」。

37 諸子興於戰國、文集盛於二漢、至家家有製、人人有集。其美者足以敘情志、敦風俗、其弊者祇以煩簡牘、疲後生。

往者既積、來者未已、翹足志學、白首不徧。或昔之所重、今反輕、今之所重、古之所賤。嗟我後生博達之士、有能品藻異同、刪整蕪穢、使卷無瑕玷、覽無遺功、可謂學矣。^⑦

諸子は戰國時代に興隆し、文集は兩漢時代に盛んになって、諸家それぞれに書を成し、人それぞれに文集がある。その優れたものは思想感情を述べて、風俗を治めるのに役だった、その劣つたものはただ紙幅を費やすだけで、後世の人を疲らせる。過去の作品の蓄積に加えて、將來も作り續けられるから、若いころから學問への強い意欲を持っていた、白髪頭になるまでまだ全てに目を通せない。また過去に重んじられたが、今では輕んぜられるものもある。今は重んじられていても、過去には蔑まれていたものもある。後生の博く見識のある人が、よく異同を見極めて、蕪穢さを削り整え、卷に缺陷がなく、評價に遺漏のないようにしてくれるなら、學ぶに値するものといえるだろう。

〔注〕

① 諸子興於戰國云云 この章は戰國時代に始まる個人の著述について述べる。特に原據となる文章はない。諸子は、經書を除く諸學派の書を指す。『漢書』藝文志に、「戰國從衡、眞僞分爭、諸子之言、紛然敂亂」。

② 文集盛於二漢 文集は、個人の家集、『隋書』經籍志以後のいわゆる別集をいう。『隋書』經籍志別集類序に、「別集之名、蓋漢東京之所創也。自靈均已降、屬文之士衆矣、然其志尚不同、風流殊別。後之君子、欲觀其體勢、而見其心靈、故別聚焉、名之爲集。辭人景慕、竝自記載、以成書部」。なお「文集」の語は、劉勰『文心雕龍』隱秀篇に、「凡文集、勝篇不盈十一、篇章秀句、裁可百二」。同時代の沈約『宋書』には、「文集傳於世」（五七蔡興宗傳、六〇王韶之傳）などの句が頻用される。

③ 來者『論語』子罕篇に、「後生可畏。焉知來者之不如今也」。

④ 翹足志學 「翹足」は、爪先だつて待望する。『後漢書』五十六陳球傳に、「政出聖主、天下太平、可翹足而待也」。「志學」は、『論語』爲政篇に、「吾十有五而志于學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲、不踰矩」。

⑤ 品藻 揚雄『法言』に、「仲尼之後、訖于漢道、德行顏・閔、股肱蕭・曹、爰及名將尊卑之條、稱述品藻」。この文を

引く『漢書』揚雄傳の顔師古注に、「品藻者、定其差品及文質」。

⑥ 蕪穢 梁の昭明太子蕭統「文選序」に、「自姬漢以來、眇焉悠邈、時更七代、數逾千祀、詞人才子則名溢於縹囊、飛文染翰則卷盈乎緗帙。自非略其蕪穢、集其清英、蓋欲兼功大半難矣」。

⑦ 可謂學矣 『大戴禮記』曾子立事篇に、「曾子曰、『君子攻其惡、求其過、彊其所不能、去私欲、從事於義、可謂學矣。』」。

38 夫聰明疏通者戒於太察、寡聞少見者戒於壅蔽、勇猛剛強者戒於太暴、仁愛溫良者戒於無斷也。

いったい聰明でものごとに通じている者は過剰な洞察力を自戒し、寡聞で識見に乏しい者は塞ぎ蔽われる點を自戒し、勇猛で剛強な者は無暴さを自戒し、人情深く穩健な者は決斷の惡さを自戒する。

〔校勘〕

* 疏…抄本↓疎。 * 於…抄本↓于。

〔注〕

① 夫聰明疏通者戒於太察云云 『漢書』八一匡衡傳に引く匡衡の上疏に、「治性之道、必審己之所有餘、而強其所不足。蓋聰明疏通者戒於太察、寡聞少見者戒於壅蔽、勇猛剛強者戒於太暴、仁愛溫良者戒於無斷、湛靜安舒者戒於後時、廣心浩大者戒於遺亡。必審己之所當戒、而齊之以義、然後中和之化應、而巧僞之徒不敢比周而望進」。

② 壅蔽 『漢書』は「壅」を「雍」に作り、顔師古注に、「雍讀曰壅」。

39 世有習干戈者、賤乎俎豆、修儒行者、忽行武功。范甯以王弼比桀・紂、謝混以簡文方赧・獻、季長有顯武之論、文度有廢莊之說、余以爲不然。余以孫・吳爲營壘、以周・孔爲冠帶、以老・莊爲歡宴、以權實爲稻糧、以下筮爲神明、以政治爲手足。一圍之木持千鈞、五寸之棰制開闔。總之者明也。

世には武事に習熟した者は、とかく文事を粗末にし、儒家の教理に通じた者は、とかく武事を疎かにする。范甯は王弼を桀・紂のような暴君になぞらえ、謝混は晉の簡文帝

を周の赧王や漢の獻帝のような亡國の君主にたとえたし、馬融（季長）には武事を稱揚する論があり、王坦之（文度）には莊子抹殺の説があるが、わたしは同意できない。わたしの考えでは孫武と呉起は陣地に、周公と孔子は禮制に、老子と莊子は宴席に、佛法は食糧に、卜筮は神の智恵に、政治は手足に相當する。一圍えの木で千鈞の重さを支え、五寸の門で門の開閉をつかさどる。中樞にあつて一切を總べるのは明智である。

校勘

*行・抄本↓乎。*季・底本は「李」に作るが、抄本・四庫本により改める。*度・底本をはじめ諸本とも「莊」に作るが、『晉書』王坦之傳により改める。

注

- ① 世有習干戈者云云 世に行なわれる諸學派の思想にはそれぞれ社會的な存在意義があるという持論を説く。『干戈』は、たてとほこで、武器の總稱、また戦争。
- ② 俎豆 祭祀に用いられるまな板と高坏。儒家の儀禮を象徵する。『論語』衛靈公篇に、「衛靈公問陳於孔子。孔子對曰、

『俎豆之事、則嘗聞之矣。军旅之事、未之學也』。明日遂行。』『論語』を意識しつつ武事と對應させた例として、『文選』二六、晉の潘尼の「迎大駕」に、「俎豆昔嘗聞、军旅素未習。且少停君駕、徐待干戈戡」。

- ③ 儒行『禮記』に儒行篇があり、鄭玄注に、「以其記有道德之所行。儒之言、優也、和也。言能安人能服人也」。

- ④ 武功『詩』邶風「七月」に、「二之日其同、載績武功」。孔穎達疏に、「至二之日之時、君臣及其民俱出田獵、則繼續武事、年常習之、使不忘戰也」。

- ⑤ 范甯以王弼比桀・紂 范甯（三三九～四〇一）、字は伯孫、南陽順陽（河南省）の人。東晉の中書侍郎から豫章太守に至った。經學に勤め、著書に『春秋穀梁傳集解』がある。『晉書』七五本傳に、「時以浮虛相扇、儒雅日替、甯以爲其源始於王、弼・何晏、二人之罪深於桀・紂、乃著論曰、『（上略）王・何蔑棄典文、不遵禮度、游辭浮說、波蕩後生、飾華言以翳實、騁繁文以惑世。搢紳之徒、翻然改轍、洙泗之風、緬焉將墜。遂令仁義幽淪、儒雅蒙塵、禮壞樂崩、中原傾覆。古之所謂言僞而辯、行僻而堅者、其斯人之徒歟。云云』」。

- ⑥ 謝混以簡文方赧・獻 謝混（？～四一二）、字は叔源。梁國陽夏（河南省）の人。東晉の文人で、官は中書僕射に至った。『晉書』七九に傳がある。ただし、ここに引かれるような謝混の論は、『晉書』では謝靈運の發言として見える。『晉書』九簡文帝紀に、「帝雖神識恬暢、而無濟世大略、故謝安

稱爲惠帝之流、清談差勝耳。沙門支道林嘗言、『會稽有遠體而無遠神』。謝靈運述其行事、亦以爲赧・獻之輩云。云云。

赧王は、周の最後の帝。獻帝は、後漢の最後の帝。

⑦ 季長有顯武之論「季長」は、馬融（七九～一六六）の字。扶風茂陵（陝西省）の人。後漢の代表的な儒者・文人で、大儒鄭玄は門人の一人。官は南郡太守に至った。『後漢書』六〇上に傳がある。本傳に、「（永初）四年、拜爲校書郎中、詣東觀典校祕書。是時鄧太后臨朝、隲兄弟輔政。而俗儒世士、以爲文德可興、武功宜廢、遂寢蒐狩之禮、息戰陳之法、故猾賊從橫、乘此無備。融乃感激、以爲文武之道、聖賢不墜、五才之用、無或可廢。元初二年、上「廣成頌」以諷諫。」

⑧ 文度有廢莊之說「文度」は、王坦之（三三〇～三七五）の字。太原晉陽（山西省）の人。官は東晉の徐州・兗州刺史に至った。刑名の學を尙び、時俗の放蕩を批判した。『晉書』七五に傳がある。本傳に、「坦之有風格、尤非時俗放蕩、不敦儒教、頗尙刑名學、著「廢莊論」曰、云云。」

⑨ 孫・吳「孫」は、孫武。春秋齊の樂安の人。「吳」は、吳起。戰國衛の左氏の人。ともに著名な兵法家で、『史記』六五孫子吳起列傳に傳がある。『荀子』議兵篇に、「善用兵者、感忽悠閑、莫知其所從出。孫・吳用之、無敵於天下、豈必待附民哉。」

⑩ 周・孔 周公と孔子。儒家を代表する存在。『文選』一五、漢の張衡の「歸田賦」に、「彈五絃之妙指、詠周・孔之圖書」。

金樓子譯注（十四）（興膳）

⑪ 老・莊 老子（老聃）と莊子（莊周）。道家を代表する存在。

⑫ 權實 佛教をいう。こと分けずれば、權教と實教。「權」は、假りのものの意で、佛教でいう方便に當たる。「實」は、眞實不變の教え。佛教の教えはその両面から成る。『廣弘明集』二〇、梁簡文帝蕭綱の「大法頌序」に、「將欲改權、教示實道」。また「二諦現空有之津、二智包權實之底」。

⑬ 神明『易』繫辭傳下に、「乾坤其易之門邪。乾陽物也、坤陰物也。陰陽合德而剛柔有體、以體天地之撰、以通神明之德。其稱名也、雜而不越」。

⑭ 一園之木持千鈞二句『淮南子』主術訓に、「故十園之木、持千鈞之屋、五寸之鍵、制開闔。豈其材之巨小哉、所居要也」。また『說苑』叢談に、「一園之木、持千鈞之屋、五寸之鍵、而制開闔。豈材足任哉、蓋所居要也」。

40 顏回希舜*、所以早亡、賈誼好學、遂令速殞。揚雄作賦、有夢腸之談、曹植爲文、有反胃之論。生也有涯、智也無涯。以有涯之生、逐無涯之智。余將養性養神、獲麟於金樓之制也。

顏回は舜のようにありたいと願ったがゆえに、早く亡く

なり、賈誼は學問を好むあまり、壽命を縮めた。揚雄は賦を制作中に、辛苦のあまり腸が飛び出す夢を見たといわれ、曹植は文章創作の折り、考えつめて胃が逆しまになったという話がある。人の生命には限りがあるが、智の働きは無限である。我々は有限の生命によって、無限の智を追求している。わたしは生命と精神を大切に守りながら、『金樓子』を終生の作として完成させたいものだ。

〔校勘〕

*舜・抄本→聖。

〔注〕

- ① 顏回希舜二句 顏回（前五二―前四九〇）、字は子淵。顏淵ともいう。春秋魯の人で、孔子門下の最も優れた弟子だったが、三十二歳にして師に先だつて死んだ。『史記』仲尼弟子列傳に傳がある。『論語』雍也篇に、「哀公問、『弟子孰爲好學』。孔子對曰、『有顏回者、好學、不遷怒、不貳過。不幸短命死矣、今也則亡。未聞好學者也』」。顏回が魯の定公に對して、舜の政治を稱賛した話が『荀子』哀公篇に見える。『昔舜巧於使民、而造父巧於使馬。舜不窮其民、造父不窮其

馬、是舜無失民、造父無失馬也」。

- ② 賈誼好學二句 賈誼（前二〇〇―前一二八）は、洛陽（河南省）の人。年少にして諸家の書に通じ、前漢の文帝に召されて博士となった。ほどなく太中大夫に拔擢され、禮樂制度について獻策を行なうなど才子ぶりを發揮したが、周圍の妬みを蒙つて宮廷を追われ、長沙王の太傅、次いで梁の懷王の太傅に左遷された。梁王が落馬して死ぬと、悲歎のあまり亡くなった。『史記』八四、『漢書』四八に傳がある。『史記』に、「居數年、懷王騎、墮馬而死、無後。賈生自傷爲傳無狀、哭泣歲餘、亦死。賈生之死、時年三十三矣」。

- ③ 揚雄作賦二句 揚雄（前五三―一八）、字は子雲。蜀郡成都（四川省）の人。前漢後期を代表する學者・文人。成帝の時代に侍郎から給事黃門となり、新の王莽政權下で大夫となった。『漢書』八七に傳がある。『文選』七に收められる揚雄「甘泉賦」の李善注に桓譚「新論」を引いて、「雄作「甘泉賦」一首、始成、夢、腸出、收而內之、明日遂卒」。『藝文類聚』七五方術部疾・『意林』三にも引かれ、文に多少の異同がある。

- ④ 曹植爲文二句 曹植（一二―一三二）、字は子建。魏の武帝曹操の第三子。文才に秀で、鍾嶸『詩品』によつて漢魏以來最高の詩人と評價された。『三國志』魏書一九に傳がある。說蕃篇22參照。『太平御覽』三七六人事部一七胃に引かれる『魏略』に、「陳思王精意著作、食飲損減、得反胃、病也」。

⑤ 生也有涯云云 『莊子』養生主篇に、「吾生也、有涯、而知也無涯。以有涯隨無涯、殆已。已而爲知者殆而已矣」。

⑥ 養性養神 「養性」は、『莊子』にいう「養生」に同じ。

『淮南子』俶眞訓に、「靜漠恬澹、所以養性也」。「養神」は、『莊子』刻意篇に、「純粹而不雜、靜一而不變、惓而無爲、動而以天行、此養神之道也」。

⑦ 獲麟 『春秋左氏傳』哀公十四年の經文に、「十有四年春、西狩獲麟」。杜預注に、「麟者仁獸、聖王之嘉瑞也。時無明王出而遇獲。仲尼傷周道之不興、感嘉瑞之無應、故因『魯春秋』而脩中興之教、絕筆於獲麟之一句、所感而作、固所以爲終也」。

41 夫石田不生五穀^①、構山^②不游麋鹿、何哉^{*}。以其無所因也。故龍藉風而飛、龜由火而兆^③、有其資焉。常善利物、無棄人^④也。富貴不可以傲貧、賢明不可以輕暗。夷吾侈而鮑叔廉^⑤、其性不同也。張竦潔而陳遼汚^⑥、其行不齊也。然而終能相善者、蓋無棄人之謂也。

いったい石ころの田地に五穀が育たず、人工の築山に鹿が遊ばないのは、なぜか。その據りどころとなるものがない

金樓子譯注（十四）（興膳）

いからだ。だから龍が風の力を借りて飛び、龜が火に炙られて兆しを現わすのは、持ち前とするところがあるからだ。常に善く人を利するものは、どんな人も見棄てない。富める者が貧しい者をあなどつてはならないし、賢い者が愚かな者を軽んじてはならない。管仲（夷吾）は贅澤で鮑叔牙は質素なのに「二人が親密だったのは」、二人の氣質が違っていたからだ。張竦はつましく陳遼はだらしないのに「彼らの友情が厚かったのは」、二人の行動が異なっていたからだ。對照的な個性にもかかわらずずっと仲が良かったのは、相手を見棄てることがなかったからである。

〔校勘〕

*哉・抄本↓者。

〔注〕

① 夫石田不生五穀 『淮南子』道應訓に、「澧水之深千仞、而不受塵垢、投金鐵鍼焉、則形見於外。非不深且清也、魚鼈龍蛇莫之肯歸也。是故石上不生五穀、禿山不游麋鹿、無所陰蔽隱也」。『文子』上禮篇にもほぼ同じ文がある。

② 構山 庭園などに造る築山。『太平御覽』一九六居處部二

四苑圃に『渚宮故事』を引いて、「湘東王於子城中造湘東苑。穿地構山、長數百丈、植蓮蒲、緣岸雜以奇木、其上有通波閣、踏水爲之。云云」。なお湘東王とは、『金樓子』の著者蕭繹のこと。

③ 故龍藉風而飛二句 『大戴禮記』曾子天圓篇に、「龍非風不舉、龜非火不兆」。「龜」とは、占いに用いる龜の甲羅をいう。『說文解字』卜部に、「桃、灼龜坼也。從卜兆、象形」。

④ 常善利物二句 『老子』第二十七章に、「是以聖人常善救人、故無棄人。常善救物、故無棄物、是謂襲明。故善人者不善人之師、不善人者善人之資。不貴其師、不愛其資、雖智大迷、是謂要妙」。

⑤ 夷吾侈而鮑叔廉四句 『意林』五に引く魏文帝『典論』に、「夷吾侈而鮑叔廉、此其志不同也。張竦潔而陳遵汚、此其行不齊也」。「夷吾」は、管仲の字。本篇24に既出。その注④参照。管仲と鮑叔牙との友情は、『史記』六二管晏列傳に描かれる。「管夷吾者、潁上人也。少時常與鮑叔牙游、叔牙知其賢。管仲貧困、鮑叔終善遇之、不以爲言」。そして管仲が榮達してのちの述懐に、「吾始困時、嘗與鮑叔買、分財利多自與、鮑叔不以我爲貪、知我貧也。吾嘗爲鮑叔謀事而更窮困、鮑叔不以我爲愚、知時有利不利也。吾嘗三仕三見逐於君、鮑叔不以我爲不肖、知我不遭時也。吾嘗三戰三走、鮑叔不以我爲怯、知我有老母也。公子糾敗、召忽死之、吾幽囚受辱、鮑叔不以我爲無恥、知我不羞小節而恥功名不顯於天下也。生我

者父母、知我者鮑子也」。二人の友情は「管鮑交」として名高い。なお管仲の奢侈については、傳の末尾に次のようにある。「管仲富擬於公室、有三歸、反玷、齊人不以爲侈」。

⑥ 張竦潔而陳遵汚 張竦と陳遵は前漢末の人。『漢書』九二游俠傳の陳遵傳に、「遵少孤、與張竦伯松俱爲京兆史。竦博學通達、以廉儉自守、而遵放縱不拘、操行雖異、然相親友、哀帝之末俱著名、爲後進冠。（中略）（遵）常謂張竦、『吾與爾猶是矣。足下諷誦經書、苦身自約、不敢踰越、而我放意自恣、浮湛俗間、官爵功名、不減於子、而差獨樂、顧不優邪』。竦曰、『人各有性、長短自裁。子欲爲我亦不能、吾而效子亦敗矣。雖然、學我者易持、效子者難將、吾常道也』」。

④② 或説「人須才學、不資矜素」、余謂不然。昔孔文舉有言、「三人同行、兩人聰雋、一夫底下。」^③ 饑年無食、謂宜食底下者。譬猶蒸一猩猩、煮一鸚鵡耳。^④ 此蓋悖道之言也、寧有是乎。禰衡云、「苟彊彊可與語、餘人皆酒甕飯囊」。^⑤ 魏時劉陶語人曰、「智者弄愚人、如弄一丸於掌中」。^⑦

ある人が「人は才知と學問こそが大切で、慎み深さなど必要ない」と言ったが、わたしはそうは思わない。むかし

孔融（文學）がこんなことを言った。「三人が連れだつて旅をしたのに、二人は聰明な人で、一人は知能が劣った。」

「聰明な二人が思うには」饑饉の年で食糧がないから、あの劣った奴を食べるのがよからう。それは猩猩を蒸し焼きにしたり、鸚鵡を煮て食べるようなものだ」と。これは人の道に悖る言であり、そんなことがあってよいはずがない。禰衡が言うには、「荀彧はどうか話ができるが、他の連中はみな酒がめか飯袋のような奴だ」。魏の時代の劉陶が人に言ったことに、「智者が愚人を翻弄するのは、手のひらで玉をころがすようなものだ」。

〔校勘〕

*不資矜素…底本の校注に、「案此句疑誤」。抄本↓按此句疑誤。
*饑…抄本↓飢。*甕…四庫本↓瓮。瓮は甕と同義。

〔注〕

① 不資矜素 底本の校注に「案此句疑誤」というように、この句よく讀めない。また前後の脈絡に曖昧な箇所がある。「矜素」の語の用例は未見。許逸民『校箋』は「不矜資素」に作るべきだとする。

② 昔孔文學有言云云 孔文學は、孔融。31に既出。その注①

参照。以下の文の趣意は、『意林』五に引く楊泉『物理論』にはば見合う。『物理論』を原據として手を加えたものか。

「漢末有管秋陽者、與弟及伴一人避亂俱行。天雨雪、糧絕、謂其弟曰、『今不食伴則三人俱死』。乃與弟共殺之、得糧達舍、後遇赦無罪。此人可謂善士乎。孔文學曰、『管秋陽愛先人遺體、食伴無嫌也』。荀侍中難曰、『秋陽貪生殺生、豈不罪邪』。文學曰、『此伴非會友也。若管仲啖鮑叔、貢禹食王陽、此則不可。向所殺者、猶鳥獸而能言耳。今有犬齧一狸、狸齧一鸚鵡、何足怪也。昔重耳戀齊女而欲食狐偃、叔敖怒楚師而欲食伍參、賢哲之忿、猶欲啖人、而況遭窮者乎』。

③ 底下『釋名』釋地に、「地、底也。其體底下、載萬物也」。

④ 譬猶蒸一猩猩二句『禮記』曲禮上に、「鸚鵡能言、不離飛鳥、猩猩能言、不離禽獸。今人而無禮、雖能言、不亦禽獸之心乎」。

⑤ 禰衡云云云 禰衡（一七三—一九八）、字は正平。平原般（山東省）の人。後漢末の文人。少壯にして文才と辯舌に長けたが、傲慢不遜の性格を曹操や劉表に持て餘され、江夏太守黃祖に殺された。『後漢書』八〇文苑列傳下・「三國志」魏所一〇に傳がある。『抱朴子』彈禰篇に、「衡遊許下、自公卿國士以下、衡初不稱其官、皆名之云阿某、或以姓呼之爲某兒。呼孔融爲大兒、呼楊脩爲小兒。荀彧猶強可與語、過此以往、皆木梗泥偶、似人而無人氣、皆酒甕飯囊耳」。『顏氏家訓』誠

兵篇に、「習五兵、便乘騎、正可稱武夫爾。今世士大夫、但不讀書、即稱武夫兒、乃飯囊酒甕也」。

⑥ 荀彧 荀彧（一六三～二一三）、字は文若。潁川潁陰（河南省）の人。曹操に重用されて、侍中次いで守尚書令となったが、曹操に九錫を加えることに異議を唱えて、自殺に追いこまれた。『後漢書』七〇・『三國志』魏書一〇に傳がある。

⑦ 劉陶 『三國志』一四劉曄傳に、「少子陶、亦高才而薄行、官至平原太守」。また裴松之注に引く『傅子』に、「陶字季治、善名稱、有大辯。曹爽時爲選部郎、鄧颺之徒稱之以爲伊呂。當此之時、其人意陵青雲、謂玄曰、『仲尼不聖。何以知其然。智者圖國、天下羣愚、如弄一丸于掌中、而不能得天下』」。

43 晉中朝庾道季云、「廉頗・藺相如、雖千載死人、凜凜如有生氣。曹攄・李志、雖久在世、黯黯如九泉下人。皆如此便可結繩而理」④。竝抑抗之論也⑤。

晉の庾劭（道季）は言った、「廉頗・藺相如は、千年前に死んだ人だが、凜凜として生氣がある。曹攄・李志は、生きている人だが、氣息奄奄としてあの世の人のようだ。誰もがこんな風なら「上古の時代のように」繩目を結んで

世は治まる」。いずれも誇大な議論だ。

〔校勘〕

*攄…抄本・百子本↓蜷。*黯黯…抄本・百子本↓厭厭。*皆…抄本は上に「人」字がある。

〔注〕

① 晉中朝庾道季云云「中朝」は、東晉の人が南渡以前の西晉時代を稱する語。しかし、庾劭（三二九～三六六）は東晉の人だから、「中朝」の語はふさわしくない。筆者の誤解か。庾劭、字は道季。潁川鄆陵（河南省）の人。『世說新語』品藻篇に、「庾道季云、『廉頗・藺相如、雖千載死人、懷懷恆如有生氣。曹蜷・李志、雖見在、厭厭如九泉下人。人皆如此、便可結繩而治、但恐狐狸猶嘯盡』」。

② 廉頗・藺相如 廉頗は、戰國趙の將軍で、勇猛さを以て聞こえた。藺相如も同時期の趙の名將で、秦に使いた際に和氏の璧を全うして使命を果たした「完璧」の故事で知られる。廉頗とは「刎頸之交」を結んだ仲だった。『史記』八一廉頗藺相如列傳に傳がある。

③ 曹攄・李志 曹攄は、『世說新語』では「曹蜷」に作る。劉孝標注に、蜷、曹茂之小字也。また『曹氏譜』を引いて、「茂之、字永世、彭城人也。祖詔、鎮東將軍司馬。父曼、少

府卿。茂之仕至尚書郎」。李志は、『世說新語』の劉孝標注に、『晉百官名』を引いて、「志、字溫祖、江夏鍾武人」。また『李氏譜』を引いて、「志祖重、散騎常侍。父慕、純陽令。志仕至員外常侍・南康相」。

④ 皆如此便可結繩而理『世說新語』の劉孝標注に、「言人皆如曹・李質魯淳慤、則天下無姦民、可結繩致治。然才智無聞、功迹俱滅、身盡於狐狸、無擅世之名也」。「結繩而理」は、『易』繫辭傳下に、「上古結繩而治」。「理」は「治」と同義。

⑤ 抑抗之論『後漢書』四〇下班固傳の論に、「若固之序事、不激詭、不抑抗、贍而不穢、詳而有體、使讀之者臺臺而不厭、信哉其能成名也」。李賢注に、「抑、退也。抗、進也」。また『三國志』魏書一〇荀彧傳に見える荀彧の言に「十萬之衆」とあるのについて、裴松之注に「云是十萬之衆、雖是抑抗之言、要非寡弱之稱」。

44 魏長高有雅體、而才學非所經。^①初官出、虞存嘲之曰、^②「與卿約法三章。談死、文筆刑、商略底罪」。^③魏怡然而笑、無忤於色。更覺長高之爲高、虞存之爲愚也。^④^⑤^⑥^⑦

魏顗（長高）は風雅の品格はあったが、才知と學問に修練が缺けていた。はじめて官に就いて出仕するとき、虞存

金樓子譯注（十四）（興膳）

がからかって言った、「君と法三章を取り決めよう。談論すれば死罪、文章を書けば體刑、人物評論をすれば有罪とね」。魏はにこやかに笑うだけで、逆らう様子もなかった。これからすると長高はいっそう高く、虞存は愚かに見える。

〔校勘〕

*經…抄本↓務。四庫本↓矜。*卿…抄本↓君。*底…抄本・百子本↓抵。

〔注〕

① 魏長高有雅體『世說新語』排調篇に、「魏長齊雅有體量、而才學非所經。初宦當出、虞存嘲之曰、『與卿約法三章。談者死、文筆者刑、商略抵罪』。魏怡然而笑、無忤於色」。劉孝標注に『魏氏譜』を引いて、「顗、字長齊、會稽人。祖胤、處士。父說、大鴻臚卿。顗仕至山陰令」。顗の字長齊について、余嘉錫『世說新語箋疏』に程炎震の語を引いて、『金樓子』立言篇作魏長高。又云、『更覺長高之爲高、虞存之爲虞也』、則長齊當作長高、草書相近之誤耳。ここでは「高」のままとする。

② 才學非所經『世說新語』規箴篇に、「郗太尉晚節好談。既

雅非所經、而甚矜之」。

③ 虞存 『世說新語』政事篇の劉孝標注に孫統「存誅敘」を引いて、「存、字道長、會稽山陰人也。祖陽、散騎常侍。父偉、州西曹。存幼而卓拔、風情高逸。歷衛軍長史・尚書吏部郎」。

④ 約法三章 漢高祖の故事に倣ったもの。『史記』八高祖本紀に、「吾與諸侯約、先入關者王之、吾當王關中。與父老約法三章耳。殺人者死、傷人及盜抵罪、餘悉除去秦法」。談（清談の類）・文筆・商略（人物評論）の三つは魏長高の苦手なものだから、心して近づくなど暗に論したのである。

⑤ 文筆 文は詩・賦のような有韻の文、筆は無韻の文を指す。『文心雕龍』總術篇に、「今之常言、有文有筆、以爲無韻者筆也、有韻者文也」。

⑥ 商略 『世說新語』品藻篇に、「劉丹陽・王長史在瓦官寺集、桓護軍亦在、共商略西朝及江左人物」。

⑦ 更覺長高之爲高二句 「爲高」は魏頤の字「長高」に掛け、「愚」は「虞存」の姓「虞」と同音であることに掛けたしゃれ。

45 卞彬爲禽獸決錄云、「羊淫而狼、猪卑而率、鵝頑而傲、狗險而出」、皆指斥貴勢。其蝦蟇科斗賦云、「紆青拖紫、出入苔中」、比當時令僕也。「科斗唯唯、羣浮閭水、唯朝繼

夕、隼役如鬼」、比令史忤事也。非不才也。然復安用此才乎。

卞彬は『禽獸決錄』を著わして言うには、「羊は淫らで心がねじけているし、猪は卑しくてがさつだし、鵝鳥は頑なで傲りたかぶっているし、狗は陰險で出しゃばりだ」。これらはみな權力者たちを指弾している。その「蝦蟇科斗賦」に言うには、「青や紫をくねらせながら、苔の中に出たり入ったり」と、これは當時の尚書令と尚書僕射をなぞらえる。また「おたまじゃくしはぞろぞろと、暗い水面に群がり浮かび、朝から晩まで、亡者のように書類作成に大わらわ」とは、令史が政事をとりしきるさまをなぞらえる。才氣がないわけではないが、それが何の役に立つのやら。

〔校勘〕

* 卞彬爲禽獸決錄云云…底本校語にいう。「案『太平御覽』引齊卞彬『禽獸決錄』云、「羊性淫而狼、猪性卑而犢、狗性險而出、皆指斥當時貴勢。羊淫狼謂呂文顯、猪卑犢謂朱隆之、狗險出謂呂文庶也。無鵝頑而傲句」。」* 狼…『南史』は「猥」に、『御覽』は

「很」に作るが、同義。*率…底本は「蠻」に作るが、『南齊書』『南史』に従って改める。

〔注〕

- ① 卞彬爲禽獸決錄云云云 卞彬（生卒年未詳）、字は士蔚。濟陰宛句（山東省）の人。南齊に仕えて、永元年間に平越長史・綏建太守に至った。『南齊書』五二・『南史』七二のいずれも文學傳に傳がある。ここに引用される文は兩書ともに引くが、『禽獸決錄』の名は『南史』にのみ見える。『南齊書』本傳に、「彬又目禽獸云、『羊性淫而狠、猪性卑而率、鵝性頑而傲、狗性險而出』。皆指斥貴勢」。『南史』本傳に、「又爲『禽獸決錄』。目禽獸云、『羊性淫而狠、猪性卑而率、鵝性頑而傲、狗性險而出』。皆指斥貴勢。其羊淫假謂呂文顯、猪卑率謂朱隆之、鵝頑傲謂潘敞、狗險出謂文度。其險詣如此」。『太平御覽』八八九獸部一敍獸に、「齊卞彬『禽獸決錄』曰、『羊性淫而狠、猪性卑而率、狗性險而出』。皆指斥當時貴勢。羊淫假謂呂文顯、猪卑率謂朱隆之、狗險出謂呂文庶也」。
- ② 其蝦蟇科斗賦云云云 『南齊書』本傳に、「其『蝦蟇賦』云、『紆青拖紫、名爲蛤魚』。世謂比令僕也」。又云、『科斗唯唯、羣浮闇水、維朝繼夕、聿役如鬼』。比令史諂事也」。『南史』本傳に、「『紆青拖紫、名爲蛤魚』。世謂比令僕也。又云、『蝌蚪唯唯、羣浮闇水、唯朝繼夕、聿役如鬼』。比令史諂事也」。『太平御覽』九四九蟲多部六蝦蟇に、「卞彬

金樓子譯注（十四）（興膳）

「蝦蟆賦」云、『紆青拖紫、名蛤魚』、世謂比令僕也。又云、『蝌蚪唯唯、羣浮闇水、唯朝繼夕、聿役如鬼』、比令史諂事也。

③ 紆青拖紫 「青」と「紫」は、高官の象徴である青綬と紫綬を暗に示す。

④ 唯唯 『詩』齊風「敝笱」に、「敝笱在梁、其魚唯唯」。毛傳に、「唯唯、出入不制」。鄭箋に、「行相隨順之貌」。

⑤ 聿役 注②に引く『太平御覽』は「聿」を「筆」に作る。「聿」は手で筆を持つさまにかたどる象形の字。下級官僚である令史が書類作成に忙しく動きまわるさまをいうか。

46 蕭賁^①忌日拜官、又經醉自道父名。有人譏此事、賁大笑曰、「不樂而已、何妨拜官。溫酒之談、聊慕言在」、了無作色。賁頗讀書而無行。在家徑偷祖母袁氏物、及問其故、具道其母所偷、祖母乃鞭其母。出貨之、所得餘錢、乞問、乃沽酒供醉。本名渙、兄弟共以其儉、因爲呼賁。^{*}此人非不學、然復安用此學乎。

蕭賁は親の命日に任官を受け、またいつも酔うと父の名を口にした。ある人がそれを譏ると、賁は大笑いして、

「命日には」樂しみさえしなければよいのであり、任官を受けるのに何の不都合があろう。「むかし桓玄が父桓溫の諱を犯す」「溫酒」(燭酒)の語を聞き涙を流したという話には、心動かされるものがある」と、全く差じる様子になかった。賁は讀書にはよく勵んだが素行が修まらなかった。かつて家で祖母袁氏の物を盗み、そのわけを問われると、母が盗んだと詳しく告げたので、祖母はその母を鞭打った。盗んだ物を外で賣り拂い、得たお金をどうしたと問われると、酒を買って酔っぱらったということだった。本來は渙という名だったが、その性格がひどくひねくれているところから、兄弟はみな賁と呼ぶようになった。この人は學問がないわけではないが、これでは學問を役立てる道があるまい。

〔校 勘〕

*沽…抄本・四庫本↓沽。*爲呼…抄本・四庫本↓呼爲。

〔注〕

- ① 蕭賁 蕭賁(？(五四九)、字は文煥。南齊の武帝の曾孫。

その人と爲りについては、『南史』四四齊武帝諸子列傳に、「形不滿六尺、神識耿介。幼好學、有文才、能書善畫、於扇上圖山水、咫尺之內、便覺萬里爲遙。矜慎不傳、自娛而已。好著述、嘗著『西京雜記』六十卷」。蕭繹の湘東王時代にその法曹參軍となつたが、王とそりが合わず、殺された。

- ② 忌日拜官二句 『禮記』祭義に、「君子有終身之喪、忌日之謂也。忌日不用、非不祥也。言夫日志有所至、而不敢盡其私也。(中略)忌日、必哀、稱諱如見親、祀之忠也」。鄭玄注に、「忌日、親亡之日。忌日者、不用舉他事、如有時日之禁也」。

- ③ 不樂而已 『禮記』檀弓上に、「喪三年以爲極、亡則弗之忘矣。故君子有終身之憂、而無一朝之患、故忌日不樂」。鄭玄注に、「謂死日、言忌日不用舉吉事」。「樂」をガクと讀んで、音曲を演奏しないと解する説もある。

- ④ 溫酒之談 東晉の桓玄の故事。『世說新語』任誕篇に、「桓南郡(桓玄)被召、作太子洗馬、船泊荻渚。王大(王忱)服散後、已小醉、往看桓。桓爲設酒、不能冷飲。頻語左右、『令溫酒來』。桓乃流涕嗚咽、王便欲去。桓以手巾掩淚、因謂王曰、『犯我家諱、何預卿事』。王歎曰、『靈寶故自達』」。

- ⑤ 經 この字讀みにくい。或いは「經」の誤りか。ここではひとまず「經」の意に解する。

- ⑥ 因爲呼賁 『疏證校注』に『呂氏春秋』慎行論・壹行を引いて、「孔子ト、得賁卦。孔子曰、『不吉』。子賁曰、『夫賁亦好矣、何謂不吉乎』。孔子曰、『夫白而白、黑而黑、夫賁又何

好乎」。高誘注に、「賁、色不純也」。高誘の義解に従えば、「賁」は、混じりあつた色どりの意。

47 世人有才學不勝朋友、而好作文章、苦辱朋友。此謂學螳螂之鈇^①、運蛞蝓之甲^②、何足以云。吾少讀兵書、三十餘年、搜索數千、止爲一帙^③、菁華領襲^④、備在其中。性頗尙仁、每宏解網^⑤。重囚將死、或許伉儷自看、城樓夜寒、必綈袍^⑥之賜^⑦。狴牢併遣、狂囹空虛、盜者更鳴、還取將軍之帳^⑧、姦夫改往、復錫舍人之車^⑨。由來此事、差非一揆^⑩。但性頗狷急^⑪、或有不堪、不欲蘊蓄胸襟^{*}、須令豁然無滯、將令士庶文武、見我所懷。

世には才智や學問が友人に及ばないのに、ことさら文章を作つて、友人を貶めようとする人がいる。こんな連中は螳螂の斧を眞似、蜷轉がしが甲羅をゆすようなもので、取るに足りない。私は若いころから兵法の書を讀んで、三十數年の間に、數千卷を收集し、それらを僅か一帙に編纂したが、兵法の精髓や軌範は、すべてその中に備わつてい

る。私は仁を尙ぶ性格で、いつも廣く法の網を弛めてきた。重罪で處刑間際の囚人には、妻との面會を許してやり、寒い夜に城樓の警備に當たる兵士には、必ず厚絹製の外套を與えてやつた。獄中の罪人をみな釋放して、牢獄が空になつたこともある。盜人が能力を發揮すれば、將軍の陣幕を取つてくることもあるし、姦夫でも過去を改めれば、部下として引きつづき用いることもあつた。元來こうしたこと、杓子定規にはゆかぬものである。私は生來氣が短くて、我慢できないことがあれば、それを胸の内に溜めておこうとはせず、洗いざらいさらけ出して、士庶文武すべての者たちに自分の思いを知らせようとする。

〔校勘〕

*襲…抄本・四庫本↓袖。襲は、袖に同じ。*袍…抄本・四庫本↓袍。*胸…抄本・四庫本↓胷。

〔注〕

① 螳螂之鈇 『莊子』人間世篇に、「汝不知夫螳螂乎。怒其臂以當車轍、不知其不勝任也。是其才之美者也。戒之、慎之。」

天地篇や『淮南子』人間篇にも見える。また『韓詩外傳』八に、「齊莊公出獵、有螳螂舉足、將搏其輪。問其御曰、『此何蟲也』。御曰、『是此螳螂也。其爲蟲、知進而不知退、不量力而輕就敵』。莊公曰、『以爲人必爲天下勇士矣』。於是廻車避之、而勇士歸之」。當時行なわれていた故事を利用したものか。『金樓子』と同時代の文では、『校箋』が指摘するように、『文苑英華』六四五に収める東魏の杜弼「爲東魏檄梁文」に、「徵兵聚衆、依山傍水、舉螳螂之斧、被蜚蜚之甲、當窮轍以待輪、坐積薪而候燎」。筆者はことにこの文を意識していたかも知れない。

② 運蜚蜚之甲 「蜚蜚」は、糞蟲、糞轉がし。『爾雅』釋蟲に、「蜚蜚、蜚蜚」。郭璞注に、「黑甲蟲。噉糞土」。疏に、「蜚蜚、一名蜚蜚。黑甲、翅在甲下。噉糞土、喜取糞作丸而轉之」。『魏書』烏夷蕭衍傳に、「以彼曲師危卒、望我軍鋒、何異蜚蜚被甲、蚍蜉舉尾」。

③ 止爲一帙 「玉韜」一帙十卷を指す。本書卷五著書篇に、「玉韜一秩十卷。金樓出牧渚宮時撰」。また卷六雜記下に、「余六歲能爲詩。其後著書之中、唯玉韜最善」。『隋書』經籍志子部兵家類に、「玉韜十卷、梁元帝撰」。

④ 菁華領裏 「菁華」は、「精華」に同じ。『文選』五七、宋の顏延之「陶徵士誄」に、「至使菁華隱沒、芳流歇絕、不其惜乎」。「領裏」は、「領袖」に同じ。『文選』五九、梁の沈約「齊故安陸昭王碑文」に、「蓋百年之儀表、千年之領袖」。

⑤ 解網 「史記」殷本紀に、「湯出、見野張網四面、祝曰、『自天下四方皆入吾網』。湯曰、『嘻、盡之矣』。乃去其三面、祝曰、『欲左、左。欲右、右。不用命、乃入吾網』。諸侯聞之、曰、『湯德至矣、及禽獸』。同じ話が『呂氏春秋』異用篇にも見える。蕭繹自身の文としては、『梁書』元帝紀の太清六年五月乙酉の「赦令」に、「君子赦過、著在周經、聖人解網、聞之湯令」。

⑥ 重囚將死二句 死刑囚に對して、妻との獄中同居を許す恩典を與えたこと。「伉儷」は、夫婦。『後漢書』二九鮑昱傳の李賢注に引く『東漢觀記』に、「此陽人趙堅殺人繫獄、其父母詣昱、自言年七十餘、唯一子、適新娶、今繫獄當死、長無種類、涕泣求哀。昱憐其言、令將妻入獄、解械止宿、遂任身有子」。また『晉書』九〇喬智明傳にも、同種の記事が見える。「部人張兒爲父報仇、母老單身、有妻無子、智明愍之、停其獄。歲餘、令兒將妻入獄、兼陰縱之。人有勸兒逃者、兒曰、『有君如此、吾何忍累之。縱吾得免、作何面目視息世間』。於獄產一男。會赦、得免。其仁感如是」。

⑦ 必綈袍之賜 「史記」七九范雎蔡澤列傳に、「須賈曰、『今叔何事』。范雎曰、『臣爲人庸賃。須賈意哀之、留與坐飲食、曰、『范叔一寒如此哉』。乃取其一綈袍以賜之。索隱に「按、綈、厚綈也。音啼。蓋今之絁也」。

⑧ 盜者更鳴二句 『淮南子』道應訓に、「楚將子發好求技道之士、楚有善爲偷者往見曰、『聞君求技道之士、臣、偷也、願

以技齋一卒。子發聞之、衣不給帶、冠不暇正、出見而禮之。左右諫曰、『儉者、天下之盜也、何爲之禮』。君曰、『此非左右之所得與』。後無幾何、齊興兵伐楚、子發將師以當之、兵三卻。楚賢良大夫皆盡其計而悉其誠、齊師愈強。於是市儉進請曰、『臣有薄技、願爲君行之』。子發曰、『諾』。不問其辭而遣之。儉則夜解齊將軍之幃帳而獻之。子發因使人歸之曰、『卒有出薪者、得將軍之幃、使歸之於執事』。明又復往取其枕、子發又使人歸之。明日又復往取其簪、子發又使歸之。齊師聞之、大駭。將軍與軍吏謀曰、『今日不去、楚君忍取吾頭』。乃還師而去。故曰、無細而能薄、在人君用之耳。故老子曰、『不善人、善人之資也』。『鳴』は、『史記』七五孟嘗君列傳の「鷄鳴狗盜」の技を能くする客を用いて、難を逃れた故事を踏まえる。『說苑』一六叢談に、「梟逢鳩、鳩曰、『子將案之』。梟曰、『我將東徙』。鳩曰、『何故』。梟曰、『鄉人皆惡我鳴、以故東徙』。鳩曰、『子能更鳴可矣。不能更鳴、東徙猶惡子之聲』。

⑨ 姦夫改往二句 『戰國策』齊策三に、「孟嘗君舍人有與君之夫人相愛者。或以問孟嘗君曰、『爲君舍人而內與夫人相愛者、亦甚不義矣、君其殺之』。君曰、『睹貌而相悅者、人之情也、其錯之勿言也』。居暮年、君召愛夫人者而謂之曰、『子與文游久矣、大官未可得、小官公又弗欲。衛君與文布衣交、請具車馬皮幣、願君以此從衛君遊』。舍人於衛甚重。齊・衛之交惡、衛君甚欲約天下之兵以攻齊。是人謂衛君曰、『孟嘗君不知臣

不肖、以臣欺君。且臣聞齊・衛先君、刑馬壓羊、盟曰、『齊・衛後世無相攻伐、有相攻伐者、令其命如此』。今君約天下之兵以攻齊、是足下背先君盟約而欺孟嘗君也。願君勿以齊爲心。君聽則可、不聽臣、若臣不肖也、臣輒以頸血滿足下衿』。衛君乃止。齊人聞之曰、『孟嘗君可語善爲事矣、轉禍爲功』。

⑩ 一揆 『孟子』離婁篇下に、「地之相去也、千有餘里、世之相後也、千有餘歲。得志行乎中國、若合符節、先聖後聖、其揆一也」。孔安國『尚書序』に、「至于夏・商・周之書、雖設教不倫、雅語奧義、其歸一揆」。

⑪ 但性頗狷急云云 筆者は卷六目序篇¹²でも自分の性格について述べている。「余不閑什一、憎人治生。性乃隘急、刑獄決罪、多從厚降。云云」。「狷急」は、『後漢書』八一獨行傳の范冉傳に、「以狷急不能從俗」。

兵法軍令、省而不煩、此言當矣。乃爲法三章。¹² 一曰叛者。去燕就楚、從魏入韓、說趙王之陰謀、燒鄴都之倉廩。¹³ 故曰叛者死。二曰不附。夫不附者、功成欲受其祿、事亂欲避其禍。玉節猶建、¹⁴ 或可畏威、金湯倘覆、¹⁵ 急須奔走。雖招厚祿、常歎脂膏、空加隆遇、不酬國士。當小寇馮陵、勤王以及、豈可見拒。抑揚橫議、¹⁶ 出入異辭。故曰不附者死。¹⁷ 三曰違令。

麾之不進、鼓之不止、應追白虎、反入青龍。¹⁸我舉正正之旗、¹⁹彼往亭亭之地、我攻卻月、²¹彼向橫雲、²²百萬之師、復何益也。²³然而李廣數奇、或非深失、²⁴龐涓戰死、偶值伏兵。²⁵故曰違令者抵辜。²⁶

兵法や軍令は、簡略を旨とし煩瑣を嫌うというが、それは當っている。そこで法三章を作った。その第一は反逆者について。反逆者は燕を去って楚に就き、魏を離れて韓に入るといった無節操な輩で、趙王の陰謀を説いたかと思うと、鄴都の食料庫を焼き討ちにしたりする。だから反逆者は死罪に處する。第二は懷かぬ者について。懷かぬ者は手柄を立てれば録を受け、失敗すればその禍を避けようとする。王權が確固としている間は、畏れをなすが、堅固な守りが崩れれば、忽ち慌てふためく。高い俸祿で處遇しても、更なる富貴を欲しがり、手厚い待遇を與えても、國士の身分に何ら報いるところがない。外敵が押しよせれば、馳せ參じて忠義を盡くすのを、拒むわけにはゆかぬはずだ。なのに勝手な議論ばかりで、言うことに一貫性が缺けている。

だから懷かぬ者は死罪に處する。第三には命令に背く者。進めと旗を振っても進まず、止まれと太鼓を打っても止まらず、西方の陣を攻撃すべきところを、東方の陣に突入してしまう。私が正正の旗を振っているのに、向こうでは亭亭（遙か彼方）の地を目指しており、私が却月（半月型）の陣を攻略しているのに、向こうでは橫雲（直線）型の陣に向かおうとするなら、百萬の軍勢があつたところで、何の益にもならない。けれども李廣が不運にも敗れたのは、彼自身の大きな過失ではなかったかも知れず、龐涓が戦死したのは、たまたま伏兵に出遭つたからである。だから命令に背く者は處罰する。

〔校勘〕

*歎…抄本・四庫本↓嘆。*旗…抄本↓旌。*卻…抄本・四庫本↓却。

〔注〕

⑫ 法三章 漢高祖の「法三章」に倣つたもの。44にも見えた。その注④参照。

⑬ 說趙王之陰謀二句 「叛者」の例として、前句は戰國時代

の蘇秦・張儀の暗躍、後句は後漢末の曹操を中心とする状況を連想させる。『史記』七〇張儀列傳に、「秦欲伐齊、齊・楚從親、於是張儀往相楚。楚懷王聞張儀來、虛上舍而自館之。

(中略) 張儀去楚、因逐之韓、說韓王曰、云云。(中略) 韓王聽儀計。張儀歸報、秦惠王封儀五邑、號曰武信君。使張儀東說齊湣王曰、云云。(中略) 張儀去、西說趙王曰、云云。(中略) 北之燕、說燕昭王曰、『大王之所親莫如趙。(中略) 夫趙王之很戾無親、大王之所明見、且以趙王爲可親乎。(後略)』。

⑭ 玉節猶建「玉節」は、玉製の節、すなわち天子や諸侯が使者に授けるしるしの手形。『周禮』地官掌節に、「守邦國者用玉節、守都鄙者用角節」。鄭玄注に、「謂諸侯於其國中、公卿大夫王子弟於其采邑、有命者亦自有節以輔之、玉節之制、如王爲之、以命數爲小大。角用犀角、其制未聞」。蕭繹「藩難未靜述懷」詩に、「玉節威雲夢、金鉦韻渚宮」。

⑮ 金湯倘覆「金湯」は、「金城湯池」の略。『後漢書』光武帝紀の贊に、「金湯失險、車書共道」。李賢注に、「前書曰、『金城湯池、不可攻矣』。金以諭堅、湯取其熱。光武所擊、皆失其堅固也」。

⑯ 抑揚橫議『孟子』滕文公篇下に、「聖王不作、諸侯放恣、處士橫議、楊朱・墨翟之言盈天下。天下之言、不歸楊則歸墨。楊氏爲我、是無君也、墨氏兼愛、是無父也。無父無君、是禽獸也」。

金樓子譯注(十四)(興膳)

⑰ 故曰不附者死『疏證校注』は、「吳校」の説を承け、漢高祖の「法三章」の「殺人者死、傷人及盜抵罪」に倣って、「死」「刑」「抵罪」の三等の刑法とするのが良いとし、この「死」は「刑」に改めるべきだという。妥當な論ではあるが、暫く原文のままとする。

⑱ 麾之不進二句「麾」と「鼓」は、戰鬪に際しての「進め」「退け」の合圖。『吳子』應變篇に、「凡戰之法、晝以旌旗旗麾爲節、夜以金鼓笳笛爲節。麾左而左、麾右而右、鼓之則進、金之則止、一吹而行、再吹而聚、不從令者誅。また『尉繚子』勒卒令にも、「金鼓鈴旗四者各有法。鼓之則進、重鼓則擊、金之則止、重金則退、鈴傳令也。旗麾之左則左、麾之右則右」。

⑲ 應追白虎二句『禮記』曲禮上に、「行、前朱鳥而後玄武、左青龍而右白虎」。鄭玄注に、「以此四獸爲軍陳、象天也」。

⑳ 我舉正正之旗二句『孫子』軍爭篇に、「無要正正之旗、勿擊堂堂之陳、此治變者也」。曹操注に、「正正、齊也。堂堂、大也。杜佑注に、「正正者、整齊也。堂堂者、盛大之貌也。正正者孤特象也。言敵前有孤特之兵、後有堂堂之陳。必有倚伏詐誘之謀、審察以待、勿輕邀截也。此理變詐」。

㉑ 彼往亭亭之地『六韜』鳥雲山兵に、「武王問太公曰、『引兵深入諸侯之地、遇高山盤石、其上亭亭、無有草木、四面受敵。吾三軍恐懼、士卒迷惑。吾欲以守則固、以戰則勝、爲之奈何』。『梁書』五元帝紀に引く蕭繹「馳檄告四方」に、「舉

整整之旗、掃亭亭之氣」。

② 我攻卻月二句 「卻月」「橫雲」は、いずれも合戦の陣形。

『宋書』四八朱齡石傳に、「高祖乃遣白直隊主丁昨、率七百人、及車百乘、於河北岸上、去水百餘步、爲却月陣、兩頭抱河、車置七仗士、事畢、使豎一白牀。庾信「周使持節大將軍廣化郡開國公丘乃敦崇傳」に、「澆沙聚石之營、却日橫雲之陣」。

②③ 百萬之師二句 『吳子』治兵篇に、「若法令不明、賞罰不信、金之不止、鼓之不進、雖有百萬、何益於用」。

②④ 然而李廣數奇二句 李廣（？前一一九）は、隴西成紀（甘肅省）の人。文帝の時代から武將として頭角を現わし、武帝の時に匈奴征討でしばしば功績を挙げた。元狩四年（前一一九）、大將軍衛青に従って匈奴討伐に遠征中、道を誤って衛青に遅れたことの責任を取り、自刃した。『史記』一〇九・『漢書』五四に傳がある。「數奇」は、『漢書』李廣傳に、「大將軍陰受上指、以爲李廣爲數奇、毋令當單于、恐不得所欲」。孟康注に、「奇、隻不耦也」。顏師古注に、「言廣命隻不耦合也。孟說是矣。數音所角反。奇音居宜反」。

②⑤ 龐涓戰死二句 龐涓は、戰國魏の武將。孫臏と共に兵法を學んだが、孫臏の才能を妬むあまり、罪を作つてその兩足を切斷し黥を施した。その後、魏が齊と戦つたとき、魏を率いる龐涓は、齊將田忌の後ろ盾となつていた孫臏の策略に敗れ、自害して果てた。『史記』六五孫子吳起列傳に、「龐涓行三日、

大喜、曰、『我固知齊軍怯、入吾地三日、士卒亡者過半矣』。

乃弃其步軍、與其輕銳倍日并行逐之。孫子度其行、暮當至馬陵。馬陵道隘、而旁多阻隘、可伏兵、乃斫大樹白而書之曰、『龐涓死于此樹之下』。於是令齊軍善射者萬弩、夾道而伏、期曰、『暮見火舉而俱發』。龐涓果夜至斫木下、見白書、乃鑽火燭之。讀其書未畢、齊軍萬弩俱發、魏軍大亂相失。龐涓自知智窮兵敗、乃自剄、曰、『遂成豎子之名』。

②⑥ 抵罪 漢高祖の「法三章」に、「傷人及盜抵罪」とある。

44 注④參照。「辜」は「罪」に同じ。

48

曾子^①曰、「昔楚人掩口而言、欲以說王、王以爲慢、遂加之誅」。衛太子以紙閉鼻^③、漢武帝謂聞己之臭、又致大辜。二者事殊而相似、時異而怨同。

曾子が言った、「むかし楚の人で口を掩いながら、王に意見しようとした者がいたが、王はそれを見なして、誅殺した」。衛太子は紙で鼻を蔽つたが、漢の武帝はそれを自分の臭いを嗅ぐのを嫌つていと思い、また死罪に處した。これら二つはことながらは違うが類似しており、時代は異なるが怨みは同じである。

〔注〕

① 曾子 曾子は、曾參、字は子輿。孔子の弟子で孝徳に優れ、『孝經』の作者とされる。ただし、以下に引かれる故事は、内容上から曾子の言としては似つかわしくない。筆者の誤解か。部分的には注②に引く『韓非子』に類似するところもある。

② 昔楚人掩口而言云云 『韓非子』内儲説下・六微に、「荆王所愛妾有鄭袖者、荆王新得美女、鄭袖因教之曰、『王甚喜人之掩口也。爲近王、必掩口』。美女入見、近王、因掩口。王問其故。鄭袖曰、『此固言惡王之臭』。及王與鄭袖・美女三人坐、袖因先誡御者曰、『王適有言、必亟聽從王言』。美女前、近王甚、數掩口。王勃然怒曰、『刺之』。御因揄刀而刺美人」。

『戰國策』楚策四にも類話がある。

③ 衛太子以紙閉鼻云云 「衛太子」は、戾太子劉據（前一二八―前九一）、漢の武帝の子で、母は衛皇后。衛皇后が武帝の寵愛を失うと、疎んぜられ、巫蠱の冤罪を蒙るなど不祥事が續き、追いつめられて兵を挙げたが敗れ、自殺した。『漢書』六三武五子傳に傳がある。『太平御覽』三六七八人事部八鼻に引く『三輔故事』に、「衛太子嶽鼻。太子來省疾、至甘泉宮。江充告、『太子勿入。陛下有詔、惡太子鼻嶽。尙以紙蔽其鼻』。充語武帝曰、『太子不欲聞陛下膿臭、故蔽鼻』。武帝怒太子。太子走還」。

（この譯注の作成に當たつては、淺野良治・神山ゆき・辛夏寧・津守陽の四氏による草稿を参照した。記して謝意を表する。）